君という花

ミサキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君という花

【Ｎコード】

Ｎ６８５８Ｂ

【作者名】

ミサキ

【あらすじ】

・ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．のオーヴァン視点の小説になっています。

第一話　終わりと始まり（前書き）

・ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．の『再誕』、『君想ふ声』、『歩くような速さで』のネタバレを含んでいます。

第一話　終わりと始まり

「兄さんが必ず助けてあげるからな・・・愛奈・・・」

ここはＴｈｅＷｏｒｌｄであってＴｈｅＷｏｒｌｄでない場所。

ここは“ブラックボックス”そう呼ばれる場所だった。
そして唯一、俺とアイナが二人きりになれる場所だった。

俺とアイナは偶然この場所を発見した。
リアルでは俺は日本、愛奈はドイツにいて、実際に会うことは不可能だったから、毎日の様にここで会っていた。

「今日は黄昏の碑文という本を読んであげよう」

「・・・たそがれのひぶん？」

「黄昏の碑文はＴｈｅＷｏｒｌｄの元になった物語なんだ。
天才プログラマーと呼ばれたハロルドが愛するエマの為に作った物語・・・」

「面白そう。早く読んで」

「ああ」

俺は幸せだった。いつまでもこの時が続けばいいと思っていた。

今日でこの日々が終わりを告げる事になるなんて思いもしなかった。

俺は黄昏の碑文を読み終え、アイナに感想を聞いた。
「どうだった？」
「私、このお話大好き」
「俺もだ」
そろそろ帰ろうかと思って後ろを振り向いた時、周辺の様子が一変した。
オーヴァンとアイナの目に映るのはそこかしこに広がる黒い泡状の物体。
「・・・何なんだ？あれは・・・一体・・」
「兄さん、怖い」
「大丈夫だ。俺がついている」
しかし、どうすればいいんだ・・・？
しかし手段を考える暇もなく、黒い泡がアイナに襲おうとした。
それに対してオーヴァンは身を挺(てい)してアイナを守ろうとする。
こんな所で愛奈を奪われてたまるか・・・俺にとって愛奈は命よりも大切な・・・
アイナを庇(かば)ったオーヴァンのＰＣに大量の黒い泡が流れ込んだ。
「ぐ・・・あぁぁぁ・・・」
そのまま意識がとび、オーヴァンが気付くと、アイナが倒れていた。

急いでアイナの身体に近づき、アイナの名を呼ぶが、アイナはそのまま目を開ける事はなかった。

「何で・・・こんな事に・・・」

「俺が・・・やったのか？」

ふと左腕を見ると通常の仕様では有り得ない形へと変貌（へんぼう）している事に気付いた。

「・・・何なんだこの腕は？さっきの黒い泡の影響なのか？」

そのままログアウトし、ドイツの病院に連絡をとると、愛奈が意識不明になったという事が分かった。

一時と場所が変わって月の樹のエリアギルド一

「お前から連絡をよこすとは珍しいな。欅」

「久しぶりですね・・・オーヴァン・・・」

「それで・・・用というのは何なんだ？」

「黄昏の旅団が解散して、数ヶ月。そのままＴｈｅＷｏｒｌｄにログインしないままだったのに、今になって帰ってきた。オーヴァン、今度は何を企んでいるんです？」

「いきなり呼びつけておいて、そんな質問とはな。相変わらずだなヘルバ」

「今になってその名前で呼ばれるとはね・・・それにしてもあなたは変わりましたね」

「そうか？変わったのは俺ではなく“この世界”の方だと思うんだが」

「確かにそうとも言えるかもしれませんね。それで・・・あなたの目的はやはりハセヲさんですか？」

「ハセヲを知っていたのか。流石（さすが）一流のハッカーだな。だが俺はハセヲに関して答える義理はない」

「そうですか・・・あなたがそういうつもりならいいです。もう用事は済んだので帰っていいですよ」

「それなら、帰らせてもらう」

そしてオーヴァンは帰っていった。

「ハセヲさんもですが、本当に気になるのはあなたの左腕の方ですよ。エリア一つ分もあるデータ・・・今度、八咫に聞いてみますか♪」

第一話　終わりと始まり（後書き）

話を大幅に変更しました。オーヴァン視点の小説になっています。
感想も是非お聞かせ下さい。

第二話　黄昏の旅団（前書き）

・ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．とＲｏｏｔｓのネタバレを含んでいます。

第二話　黄昏の旅団

妹ー愛奈を助けるために、俺はギルドを作ることにした。
ＴｈｅＷｏｒｌｄにおける至高の宝とされるキー・オブ・ザ・トワイライトー黄昏の鍵を見つけるための黄昏の旅団を。

俺は再誕ーコルベニクの碑文使いだった。俺の他に碑文使いはあと7人いる。
候補者の一人ー志乃は既に仲間になっているが、あとの六人をどうやって探すかが問題だ。

だが、今日新たに一人の逸材を発見した。ハセヲというＰＣだ。
あいつもおそらく碑文使いだろう。
あいつは気付いていなかったが、俺には分かった。碑文使いは惹かれあうのだから。

ハセヲがこれからどう成長していくのかそれが楽しみだ。

「なぁ、オーヴァン。黄昏の旅団の目的って何なんだ？」

「キー・オブ・ザ・トワイライトを見つける事だ」

「キー・オブ・ザ・トワイライト？それって何なんだ？」

「この世界ーＴｈｅＷｏｒｌｄにおける至高の宝さ。それを見つければ何でも願いが叶うらしい」

「そんな物が本当に有るのか？」

「有るという前提でこのゲームを遊ぶそれが俺たち黄昏の旅団だ」
「あのさ・・・何でＰＫに襲われてた俺を助けてくれたんだ？」
「それは・・・」
ガチャ・・・
「志乃が来たようだな。俺は用事が有るからログアウトする」
「えっ・・・」
オーヴァン、教えてくれなかったな。
「オーヴァンと何を話していたの？ハセヲ」
「・・・別に。そういえばタビーと一緒に冒険に行ってたんだよな。タビーはどうしたんだ？」
「勉強が有るからって帰ったよ」
「そうか、あいつも色々と大変なんだな」
聞くところによると、タビーは今看護士になる為に勉強中らしい。
「ハセヲ。ＴｈｅＷｏｒｌｄには慣れた？」
「まぁな。オーヴァンや志乃達が優しくしてくれるから」
「そう。それは良かった」
そして優しく微笑む。

「そういえば、どうしてハセヲはＴｈｅＷｏｒｌｄを始めようと思ったの？」

何て言ったらいいんだろう・・・

「・・・リアルでは体験できないことをやってみたかったからかな。まさかゲームを始めていきなりＰＫされるとは思わなかったけど」

リアル（家や学校）が窮屈なのが嫌でこのゲームをやってるなんて言えないよな。

「そうなんだ。結構意外かも」

「志乃はどうなんだ？このゲームを始めて良かったと思ってる？」

「私は良かったと思ってるよ。ＴｈｅＷｏｒｌｄを始めていなかったら、オーヴァンやハセヲとも出会えていなかったわけだし」

「確かにそうかもな」

「今まで続けてこれたのはオーヴァンに・・・」

私を見て欲しかったのかも・・・でも実際は・・・

「オーヴァンに？」

「ううん。何でもない。じゃあ私、帰るね」

「ああ」

オーヴァンも志乃もどうしたんだろうと思うハセヲだった。

第二話　黄昏の旅団（後書き）

・ｈａｃｋ／／Ｒｏｏｔｓのネタバレを含んでいると書きましたが、半分くらいしか見たことがないです。
オーヴァンってあのＰＣが碑文使いだと知っていて盗んだんですよね確か。
読んでくださった方有難うございました。良かったら感想の方もよろくお願いします。

第三話　狼と狩人（前書き）

・ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．とＲｏｏｔｓのネタバレを含んでいます。

第三話　狼と狩人

△隠されし禁断の聖域ーその場所はかつて女神がいた場所。
何故女神がここからいなくなってしまったのかーそれは誰にも分からない。

「オーヴァン・・・私、あなたの為だったら自分の身も捧げるから・・・」
だから・・・私を・・・

「志乃すまない。恩に着るよ」

左腕の封印を解き、隠されていた真の姿が露(あらわ)となる。

そして左腕から伸びる触手の様な物体が志乃の体を貫く。

「・・・これで残り六相・・・」

あとはハセヲがどう動くか・・・だな。

今の所は予定通り。“追跡者”もそろそろこちらに向かっている頃だろう。

そしてオーヴァンの身体(からだ)が青い光に包まれやがて立ち消えた。

オーヴァンがログアウトしたと同時にハセヲが聖域に入ってきた。

倒れゆく志乃と目があうハセヲ。

・・・志乃・・・何で？・・・・

「志乃おおおぉぉ！！」

「・・・ハセヲ・・・」

私の為なんかに泣かないで・・

やがて志乃の身体（からだ）が光に包まれゆっくりと消えていった。

「志乃・・・誰がこんな事を？・・・・」

その時ハセヲは気付かなかったが、聖堂の入り口からハセヲを見つめる双眸（そうぼう）が有った。

そして、ハセヲはそのままログアウトし、

志乃から教えてもらった電話番号に電話をすると志乃の母親から志乃が意識不明になったという事が告げられた。

ハセヲは部屋で茫然自失のままつぶやいた。

「志乃・・・絶対に助けるから・・・」

時は移り、ハセヲは死の恐怖と呼ばれるまでのＰＫＫとなっていた。

「・・・奴が帰ってくる・・・・！」

オーヴァンから今日、あの場所ーーー△隠されし　禁断の　聖域に志乃の仇の三爪痕（トライエッジ）が来るという情報を聞いた。

何故オーヴァンがその事を知っていたのかは分からないが・・・

「追跡者・・・“この世界”を守る為に作られた制御システム・・・」

女神は7年前に活躍した．ｈａｃｋｅｒｓを制御システムのモデルとしたらしい。

「それにしても悪趣味だな」

ハセヲが三爪痕（トライエッジ）にＤＤ（データドレイン）されて消えた場所を見ながら言う。

それは、俺にも言える事か・・・

ハセヲが碑文使いならば大丈夫だろう。未帰還者にはならないはずだ。

ハセヲには強くなってもらわねば。もう時間がないんだ・・・愛奈・・・

ハセヲが再び戻ってきたら、こう言わせてもらうよ。“Ｗｅｌｃｏｍｅ ｔｏ Ｔｈｅ Ｗｏｒｌｄ”と・・・

第三話　狼と狩人（後書き）

ハセヲは楚良と同一人物で確定らしいですね。私は同級生で友達かと思ってました。
オーヴァンはまだ佐藤一郎かどうかは謎らしいです。多分このまま明かされないんだろうなぁ。
今日知ったんですがおおばん（漢字が出ない）という鳥がいるらしいです。
オーヴァンはそこからとったんでしょうか。でもなんで鳥なんだろう。
読んでくださった方有難うございました。良かったら感想お聞かせ下さい。

第四話　茜空（前書き）

第三話とは話が繋がっていません。
黄昏の旅団時代の話です。

第四話　茜空

今日私と志乃さんは久々に二人だけでマク・アヌを歩いていた。

「二人だけっていうのも珍しいね」

「タビーはハセヲがいた方がよかった？」

ハセヲの名を聞いて何故か、自分のＰＣの顔が赤くなった様な気がして顔を伏せる。

何で私赤くなってるんだろう…

「何でハセヲの名前が出てくるの？」

志乃はそれを聞いて優しく笑い、こう言った。

「だって…ハセヲの事好きなんでしょ？」

「……うん」

こういう時の志乃さんは凄くずるいと思う。なんか私より大人って感じがして―

ここで負けっぱなしも嫌だから、今度は私が聞きたかった事を志乃さんに聞いた。

「志乃さんは…オーヴァンの事が好きなの？」

少しの間だけ二人の間に沈黙が続き、志乃が口を開く。

「…確かに私はオーヴァンの事が好きなのかも」

「なんか意外だなぁ。志乃さんって奥手っぽいから、こういう事言わないかと思ったのに」

昔の私だったらそうだったかもしれない…でもＴｈｅＷｏｒｌｄを始めて私も変わってきたのかな…

「そういえば、タビーはハセヲのどんなところが好きなの？」

「改めて言われると困るなぁ。…なんかハセヲって可愛いよね？見た目じゃなくて性格が」

いつも強がってはいるけど、ヘタレだし。

「私がハセヲに会った時、ハセヲはＰＫに襲われててＴｈｅＷｏｒｌｄを始めた頃の私にそっくりだったな」

「えー！？私は志乃さんとハセヲは全然似てないと思うよ。どちらかというと志乃さんはオーヴァンに似てる気がする」

「ありがとう。そうだ…今度ハセヲを冒険に誘ってみたら？」

「私が誘ってＯＫしてくれるかなぁ」

「タビーならきっと大丈夫だよ」

「志乃さん、ありがとう。何か勇気が出てきた。それじゃあまたね」

「ええ、また」

タビーを励ますつもりが逆に励まされちゃったなと思った志乃もこの茜空の喧騒の中へと消えていった。

第四話　茜空（後書き）

明日から学校が始まるので更新が停滞しそうです。
書くのが遅くなると思いますが、本当にすみません。
読んでくださった方有難うございました。よかったら感想の方もお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6858b/

君という花

2010年10月9日10時50分発行